

2002 年春休み 友情のレポーター カンボジア取材レポート

五十嵐 敬也（千葉県 / 当時 11 歳）

「出発前に考えた事」

昨年に起きたニューヨークでのテロ事件は、とてもショックだった。あの事件以来、僕もそれまでより、よく新聞やテレビのニュースを見るようになった。でも、難民については、その言葉は知っていたけれど、詳しくは何も知らなかった。今回の企画に是非参加したかったので、いろいろ調べた。そして世界の難民の数は、僕の住む千葉市の20数倍だと知って恐ろしくなってしまった。それから一番悲しかったのは、僕たちと同じ子どもが難民の半数を占めているという事だった。

家族も家もない子ども、おなかをすかして生死をさまよう子ども、学校に一度も行った事がない子ども、無装備のまま強制的に戦争に参加させられる子ども、今こうしているうちにも何人もの子どもたちが死んでいくなんでどうしても信じられない。それに僕は自分が難民になってしまう事は想像できない。それは今の日本が平和だからだ。僕たちにできる事はなんだろうと思った。

そして、2002年3月「僕は何をすれば良いのか・・・」それを見つけるために旅立った。

カンボジア取材日程

- 3/18 成田からバンコクへ
- 3/19 バンコクからアランヤプラテートへ
- 3/20 カンボジア入国、ポイペトからバタンバンへ
- 3/21 バタンバン
- 3/22 バタンバン
- 3/23 バタンバンからシェムリアップへ
- 3/24 シェムリアップ
- 3/25 シェムリアップからプノンペンへ、夜バンコクへ
- 3/26 バンコク
- 3/27 バンコクから成田へ

「アンコールの神様へ」

アンコールの神様

私はあなたの堂々としたお姿が大好きです。
その優しいお顔に吸い込まれそうでした。

でも

どうしてこの国は貧しいのですか
どうしてたくさんの家族が
ばらばらにならなければならないのですか
悲しい過去はいつになったら消えるのですか

どうかお願いします

みんなに贈り物を下さい

友達に食べ物をお金を家を平和を
どうかお願いします

「トラフィック・チルドレン」

3月19日、国境付近のタイ・マーケットに着いたらすぐ、その辺の子どもたちが僕たちに寄ってきた。すごく人なつっこい。僕のひじをくすぐって笑っている子もいた。何だろうと思っていたら、皆次々に僕たちに傘をさしてくれたのでびっくりした。日よけのためらしい。そして、一生懸命話しかけてきたけど、何を言っているのかわからなかった。とにかく皆で一緒に歩き続けた。レストランに着いたら、ドミニクさんが何人かにお金を渡した。傘をさすのは仕事だったのだと初めて気づいた。その後大竹さんに聞いた話によると、彼らは「トラフィック・チルドレン」と呼ばれていて、毎日カンボジアから国境を越えてタイに働きに来ているカンボジアの子どもたちだそうだ。国境ではその子たちはフリーパスで、その代わりマーケットまでしか来られない。親が死んでしまった子や、親に養ってもらえない子が一生懸命働いていた。ぼくは自分より体が小さいので、年下かと思ったけど、聞いてみると皆年上だった。栄養不良で髪は茶色くなり（ほとんど金髪に近い）僕より体も小さい。とても驚いて少し涙が出てしまった。傘は持たせてもらったらすごく重くて、さしてもらうのは悪い気がしたけど、断るのはもっと悪いと思った。どうしたら良いのかわからなくて困った。働かざるを得ない子どもなんて・・・と複雑な気持ちでいっぱいになりながら傘をさしてもらっていた。彼らは10 - 20人ぐらいでずっとついてきたので、大

行列のお祭りみたいだった。皆ドミニクさんを慕っているんだろうと思った。以前から交流があったのかなあ。

午後、今度は「若者の家」のスタッフのダラさん(現地スタッフの方)と合流した。そしてタン君探しが始まった。彼は過去2回「若者の家」から逃げ出していて、ハンディキャップを持っている母親を助けたいために逃げ出してしまうそうだ。この広い市場のどこかでサングラスを売っているらしい。僕たちはよく子どもが働かされている生鮮食品コーナーへ行き、タン君を探した。でも彼はいなかった。

その後ドミニクさんがずっとついてきていた子どもたちに食べ物をおごると、皆すごい勢いでたいらげていた。その光景は嬉しかった。大竹さん(さっき紹介しなかったが、この方も「若者の家」スタッフ)の話によると、席に座って何かを食べる事も子どもたちにとってはすごくぜいたくなのだという。それなのに皆、僕のことを気にかけていすを引いてくれたりした。ばくは暑くて倒れそうになっていたけど、この旅では絶対弱音を吐いてはいけないと思った。

ここで子どもたちとコミュニケーションをとった。皆がこんにちはと言ったのには驚いた。四方さんは「おおきに」を教えていた。皆に僕の名刺も渡した。僕も香菜さんも日本から自分の写真入りの手作り名刺を持ってきていたのだ。その後、僕と香菜さんはガー君とモンさんと話をした。彼らはカンボジアから来ているのでクメール語を話していた。

(僕らからの質問)

僕	「名前は何ですか？」
ガー君	「ガーです。」
僕	「何歳ですか？」
ガー君	「12歳です。」
僕	「何人家族ですか？」
ガー君	「16人家族でしたが一人死んで、一人病気です。」
僕	「今は誰と暮らしていますか？」
ガー君	「兄弟5人と暮らしています。」
僕	「何をして働いていますか？」
ガー君	「パーキングでシェムリアップ行きの車を見張っています。」
僕	「今は何をしていますのですか？」
ガー君	「車を待っています。」

(僕への質問)

皆	「何で色は白いのに、顔は真っ赤なんですか？」
僕	「色が白いのは、僕の国がそんなに暑くないから暑くないからで、真っ赤なのは今すごく暑いからです。」
皆	「目が中国人みたいなのはどうしてですか？」

僕 「国が近いからかなあ。」
皆 「学校には行っていますか？又何が楽しいですか？」
僕 「学校には行っています。楽しいのは国語と社会です。」
皆 「前歯がとても印象的なのはどうしてですか？」
僕 「生まれつきなんです。」
皆 「学校へ行く時どれくらいお小遣いをもらっていますか？」
僕 「お小遣いはもらっていません。」
皆 「またいつ来てくれますか？」
僕 「あなたたちが望むならいつでも来ますよ。」

最後の質問に答えたら、皆が喜んでくれた。その笑顔に感動した。最後にドミニクさんがさっきもらえなかった子どもたちにお金を渡すと、もらった子は「いただきます。」のポーズをしていた。これで何日間やっていけるのだろうか。その後、またぞろぞろ歩き別れる時カンボジア語で挨拶した。ショム君が抱きついてきたので僕が抱き上げたら年上なのにととても軽かった。なんだか申し訳ない気持ちになった・・・そしてまた会おうね チュムリアップリア！

「カンボジア入国」

3月20日、今日は7時に起きた。朝食の時、大竹さんに聞いた話だと、タイには牛乳があるけれどカンボジアには冷やす冷蔵庫がないので、ほとんどスキムミルクなのだそうだ。だからいつもカンボジアに住んでいる大竹さんは牛乳をたくさん飲んでいた。

その後、部屋に戻って荷物を取り、8時頃にトゥクトゥクでマーケットに向かった。今日は平日だから観光客なども少ないので、やはり子どもたちが僕たちに群がった。昨日の顔なじみの子が多かった。ここで初めてわかった事は、昨日皆とわかれた所は国境のすぐ近くだったという事だ。国境はタイ国際空港よりも多少警備が厳重で、ところどころに兵士の姿が見られた。でも、カンボジア商人などに変装すれば裏ルートで簡単に、国境を越えられそうだ。子どもたちの中には、裏ルートを教えてお金をもらう仕事をしている子もいるらしい。日本には国境がないので不思議な気がしたが、何気なく国境を越える程度の感じだった。通行料なのか、お金を払っているカンボジア人もいた。

8時半頃、審査を受けた後、僕は驚いた。昨日のショム君だ！と思ったら、何やら柵を登って超えようとしている。その柵は有刺鉄線のある物なのに、簡単に越えていた。昨日シャツがボロボロに破れている子がいたが、こういう事かと思った。見つかったらどうなるだろうと思ってすごくドキドキした。柵を上手に越えたショム君とも

う一人は、その後トンネルらしき穴に入っていき、逃げるように消えた。

そこからだいぶ歩いたら、さっきの子どもたちが何故かいた。そして、この辺りで子どもたちがまるで野良犬を追い払うように「しっ！しっ！」と手で追い払われているのを見て、僕は大人にすごく腹が立った。シヨム君を探したがいなかったのも、とても心配になった。さっき見た事は誰にも言っははいけない気がしたので黙っていた。ドキドキした。そして、この後も旅の間中、僕はこの事をずっと黙っていた。

国と国の間の部分が相当広い。どこからカンボジアなのか最初わからなかった。その場所にカジノや商店もあった。こちら辺でも、子どもたちがカジノの裏で帽子売りなどをしているらしい。しばらく行くとやっと国境の柵があり、兵士が3人いた。僕たちのグループだけでそこを越えるといよいよカンボジアだった！

そこはポイペトという街だった。いきなりすごい匂いがして息を止めた。悲しい事に僕のカンボジアの第一印象は「くさいっ！」だった。そして昨日お世話になったダラさんに又会った。ダラさんが手配した車に荷物を預けた後、別ルートで国境を越えた子どもたちと再会した。そこでドミニクさんがセカンドブレックファーストを子どもたちにおごった。子どもたちの中には何とさっきのシヨム君がいる！僕は目を疑ったが、ほっとした。シャツは破けていなかった。僕は何が何だかわからなかった。でも無事で良かった。良かった。

「柵」

トラフィック・チルドレンの子どもたち
みんなが持っていたのは
日焼けした肌と汚れたシャツ
そしていっしょうけんめいな瞳と生きる力

みんなが必要なのは
おいしい食べ物と優しい家族
そしてたくさんの愛情と明るい未来

苦しみの有刺鉄線でシャツを破かないで下さい。
でも心の柵はまだまだ高いのですか
どうしたら柵を乗り越えられますか

柵の向こうには自由があります
柵の向こうには未来があります
柵の向こうには希望があります

「グドー」

ポイペトで子どもたちと別れて、車で走り始めた。道路がほとんど舗装されていないので、すごく揺れた。ガタガタ揺られて10時頃「グドー」に着いた。「グドー」は子どもの保護施設でその目的は4つある。

- * シンナーなどを吸っていた子どもたちのケア 楽しい事を教える。
- * 夜泊まりに来る家のない子どもたちの受け入れ。
- * 常時そこで暮らす子どもたちのお世話。
- * 午前または午後勉強しに来る子どもたちの受け入れ。

そこにはガー君がいて、僕を見て喜んでくれた。グドーはすごく広くて、僕の通っている小学校くらいあり、何人も子どもたちがいた。年齢は幼稚園クラスから18歳くらいまでだ。敷地の真ん中に大きな池があり、校舎は平屋の高床式で、全部木と竹の手作りだった。15歳から18歳の心のケアを受けている子どもたちが校舎や家具を全て手作りしているらしい。まるでロビンフットの小屋みたいだった。その校舎では、1年生から4年生までの子どもたちが国語や算数の勉強をしており、学年と年齢はバラバラだった。皆遅れた日々を取り戻すために一生懸命だった。ガー君は12才だけど2年生だった。ガー君の教室で取材をして、いろいろな質問をした。

(僕からガー君への質問)

- 僕 「学校で一番楽しいことは何ですか？」
ガー君 「識字です。」(* 識字・・・字の練習)
僕 「学校と市場で働くのはどっちが楽しいですか？」(ガー君は市場のパーキングで車を見張っている。)
ガー君 「学校で勉強をするのが楽しいです。」
僕 「学校で友達はできましたか？」
ガー君 「たくさんできました。」
僕 「いつから学校へ通っていますか？」
ガー君 「覚えていません。」

僕たちが取材を終えて教室を出る時、皆が一斉に歌いだした。「あーりがと。さよーなら。ごーはんだ。」僕たちは大笑いしながら、手を振った。ここの子どもたちはとっても生き生きしていた。僕たちは勉強している時あんなに生き生きしているかなあと思った。食後、タン君と別れると車で一気にバタンバンへ行った。

バタンバンに着き、ひと休みした後、カンボジア特有のバイクタクシーに乗った。普通のバイクより後ろの座席が広い気がした。でも日本の只の2人乗りと変わりなく、無理やり3人又は4人で乗る感じ。道は舗装されていないし、バイクはオンボロなので、ガタガタ揺れた。商店などの前では水を撒くのだけど、それがそのまま固まって、道は穴だらけなのだ。バタンバンはほこりが凄かった。それから「若者の家」に立ち寄り、「男の子の家」と「女の子の家」を案内してもらった。この日はそれだけで帰った。今頃、タン君は何をしているのか考えていた。

「ホームランド」

3月21日、朝一番に「ホームランド」を訪れた。第一印象はとっても明るくて、温かい感じがした。着いた途端に大騒ぎになった。以前の子どもレポーターも何度か訪れているので、待っていてくれたのだと思う。まず初めに、子どもたちの話し合いをしている所を覗いたら、皆僕たちのことをもの珍しそうに見ていた。この施設に子どもたちは全部で50人いて、この中のほとんどは元トラフィック・チルドレンだそう。

休み時間になると、皆遊び出した。僕たちはここの園長先生のマオランさんにホームランドの内部を案内してもらった。ホームランドは建物が4つあり、一つは本部、後は校舎と宿舎と食堂だ。

豚を3頭飼っていて、いなかへ帰る子どもがいたら、時々生まれる豚の子どもを一匹ずつプレゼントするのだそう。その他にも貧しい人がいると無条件で豚をあげるらしい。豚もどどん子どもを生んで役に立っているなんてえらいなあと思った。話が終わると、お土産タイムが始まった。僕は早速テラスで手作り人形を取り出し「詩」の朗読を披露した。大好きな谷川俊太郎先生の「かっぱ」という詩だ。これはすごくうけた。僕のあだ名はかっぱになったようで、皆僕を見て「かっぱ」「かっぱ」と笑っていた。僕は大好きな詩を伝えられてとても嬉しかった。

その後香菜さんがシャボン玉やカードなどをプレゼントしていた。カードは香菜さんの中学校一年生全員で自己紹介をかいたものだ。良いアイデアだと思った。シャボン水をねぎでふいていた子が面白かった。この子どもたちはいろいろな知恵があると思った。僕がふいたシャボン玉がある女の子の髪にくっついた。そしたら、皆はしゃぎながら真似していた。そうやって遊んでいるときはすごく楽しくて、子どもたちに国境はないなあ実感した。

その後、元トラフィック・チルドレンの子どもたち取材した。話を聞くと、トラフィック・チルドレンの中には、トラフィックカーと呼ばれる大人に雇われている場合もある事を知った。それは親が子どもを売るのと同じだと思った。「稼ぎはほとんどトラフィックカーに取られて、稼ぎが少ないときには電気ショックを受けさせられました。」と直接聞いた時には、驚いて何も言えなかった。鳥肌がたった。その子は女の子で、まるで人事のように話していたのが余計に悲しかった。なんと答えてよいのかわからなくて、僕はじっと黙っていた。

トラフィック・チルドレンにはさまざまな事情がそれぞれにあるのを知った。ホームランドのような施設が、いつかトラフィック・チルドレン全員分できるといいなと思ったが、本当はいつかそういう施設が必要ない世の中になると良いと思った。

「若者の家」

それから「若者の家」に行って、ここでも元トラフィック・チルドレンの取材をした。「若者の家」にはホームランド出身の人もいるし、他の施設から来た人もいる。皆、社会に出るために勉強したり、職業訓練を受けたりしている。

話を聞いた人たちは、トラフィッカーに連れられてタイに行った人よりも、以外に自分の意思でタイに行った人の方が多かった。母親と一緒にいった人もいた。中にはその生活がとても気に入って10回も行った・・・と言っていた人もいて、意外だった。話をずっと聞いているとこの人たちのトラフィック・チルドレン時代はホームランドの元トラフィック・チルドレンの過去よりは良かったのかもしれないのかなと思った。それともトラフィック・チルドレン時代が楽しかったと言う事は、それだけそれまでの生活が悲惨だったという事かもしれないとも思った。

この国で言う幸せって何だろう。皆の言葉が僕の心の中でいつまでもグルグル回っていた。

その後パーティーを開いてくれて、踊ったり、ビンゴをしたりとても楽しかった。この時の皆の表情からは暗い過去は全然感じられなかった。

ここで僕の事をかまってくれたウサギのTシャツを着ていたお兄さんは、この後も僕をずっと可愛がってくれる事になる。大事な出会いだった。

この夜、ひどいホームシックにかかった。でも思った事がある。会いたい家族や、帰る家があるからホームシックにかかる。それに比べて今回出会った子どもたちは僕たちよりずっとたくましい。ホームシックはぜいたくな病気だ。

「学校を見学」

3月22日、今日は「若者の家」の皆の学校を取材に行く。「若者の家」の人たちは、ずっとそこで勉強しているのではなく、外の学校へ裁縫や木彫りを習いに行く人もいるからだ。

朝食を取った後、バイクタクシーでまず「若者の家」行った。朝だからかもしれないが、内部はひっそりしている。でも奥で絵のワークショップを聞いたので、僕たちも飛び入り参加する事になった。皆、熱心に絵を書いていてどれも芸術作品だった。皆、バラを書いていて、昨日のソン君（うさぎのTシャツのお兄さん）は赤いバラを色鉛筆で重ね塗りしていた。僕は誰かが下書きにしたバラにクレヨンで色を付けさせてもらった。隣のオフィスにはソン君たちが今までの作品が飾られていたが、感動するほどすばらしかった。

その後「若者の家」からバイクタクシー4台で、女の子が何人が通っている裁縫の学校へ行った。そこでは、皆が製図をしたり、実際服を作ったりしていた。この校

長先生は若者の家のスタッフのダラさんのお母さんで、いかにもこの道一筋30年という感じだった。それから取材をしたが、僕に全てまかされたので緊張した。ここの説明をしながら撮影した。皆、訓練をしているというより、楽しく遊んでいる感じで生き生きしていた。こうして特技があるので、ここの人たちの将来は明るいかなと思った。

そして再び「若者の家」に行った。着くと、午後の学校へ通う人たちが準備をしていたので、一緒に行ってみ学する事になった。年齢と学校がバラバラなので、僕だったら恥ずかしいけど、彼らは堂々としていた。校舎は全部平屋で、庭から教室には直接入れるようになっている。昇降口はないし、靴ははきかえないところが日本と違うけれど、後はほとんど日本と変わりなくすべり台やシーソーなどの遊具もある。「若者の家」にいる人の中には「小さい子どもたちと勉強するのが恥ずかしい。」と言って学校に来ない人もいる。そういう人は「若者の家」での勉強会に参加する。

ここでは見学しただけだった。

それから「若者の家」の女の子の家に寄って、香菜さんがお手玉をプレゼントした。皆、とても喜んで上手に遊んでいた。とにかく皆とても器用だ。チェンターさんに誘われ、ポラロイド記念撮影をしてから、バイクタクシーでスラム街へ向かった。

「スラム街」

スラム街はかなり不潔だったが、その理由はゴミだ。カンボジアの家はほとんど高床式で、床のすき間から下にゴミを捨てるようになっている。普通はゴミを下に捨てると、飼っている鳥や犬などがそのゴミを食べるから清潔なはずだ。でもスラム街の人たちは貧乏で鳥や犬などの動物を飼えないので、ゴミがそのままになっているのだと本で読んだ。ものすごい匂いだった。そして、そこに住む人たちの表情はすごく暗い感じに見えた。日本と全然違う事を実感した。

スラム街では、「若者の家」に引き取られているダラさん（ハウスキーパーのダラさんではない。）の家族の住んでいる家にダラさんと一緒に行った。ダラさんは僕よりは年上で、裁縫の訓練を受けている。9人家族で、一番上のお姉さんが家族を養っている。仕事はビールガールだけど、その稼ぎだけでは全然足りないらしい。ダラさんは3番目だ。彼女のお父さんは元々はシクロ（トゥクトゥクに似ているタクシー）の運転手をしていたが、去年飲酒運転で事故にあい左半身が麻痺して、しかもしゃべる事も表情を変える事もできなくなってしまった。今は家でなにもしないで過ごしている。お母さんは家にいて、お父さんと小さい子どもたちの面倒を見ている。一番下は5ヶ月の赤ちゃんだった。

お父さんは大工をしていた事もあって、家の材料は元職場から持ってきてお父さんが建てたそうだ。6畳くらいの部屋が2つあって、床下も使っていた。でも土地は政

府のものなので、政府が土地を取り上げればいつでも出ていかなければいけないらしい。こういう話はクメール語からスタッフのダラさんが英語に、大竹さんが英語から日本語に訳してくれた。ひとつの言葉を伝え合うのに、とても時間がかかったが、ちゃんと理解して答えがかえってきた時にはとても嬉しかった。

ダラさんに「家に帰りたいですか？」と質問したら泣き出してしまった。どうしよう、心の傷に触れてしまったのかとすごく心配になった。泣きながら「家に帰りたい。」と言っていたが、両親は「ちゃんとした環境で娘が生活できる方が嬉しい。」と言っていた。早くこの家族と一緒に暮らせる日が来るといいなと思いながら、この家を去った。

「交流」

「若者の家」に戻り、そこで暮らす何人かと一緒にレストランに向かった。皆で夕飯を食べたが、僕は疲れがたまっていて食欲がなかった。食事を残してしまい、さっきのスラム街を思い出して、罪悪感にかられた。

ソル君はこの日で「若者の家」を卒業したらしく、皆と別れを惜しんでいた。僕の事を「スモールブラザー」と言って抱き上げてくれたので、ソル君とはこの日が最初で最後だったけど、僕も親しみを感じた。そして名残惜しかったけれど、皆と別れた。この日、一番印象的だったのは、ダラさんの涙だった。家族がバラバラになるなんて僕には想像できない。

3月23日、朝「若者の家」に大竹さんと男の子2人と女の子2人を迎えに行き、僕たちはアンコールワットの街シェムリアップへ向かった。その中にソル君がいたので嬉しかった。他のメンバーはチャンター君とティーランさんとファラさんだ。道は常にでこぼこで車は揺れ続けた。どこまで行っても同じ景色なので、ベルトコンベヤーに乗って同じ所をグルグル回っている気になった。どこにも寄らずに目的地まで一気にいった。皆でいろいろな所を回り、その間皆でふざけあったりして楽しく過ごした。遺跡はだいぶ修復されていて、とってもすばらしかった。

3月24日、朝一番に行ったアンコールワットで、線香売りのおばあさんを見かけた。そのおばあさんには僕が毎日当たり前に使っている手がなかった。目の前が真っ白になった気がした。カンボジアにはまだたくさんの地雷が埋まっているという。このおばあさん以外にも何人か手足や目のない人を見かけた。人間同士の争いは本当に醜い。二度と戦争はあってはいけないと強く思った。

それから「若者の家」の人たちだけで取材をしたりしていた時、ショックな話を聞いた。それは、ひどい仕打ちを受けている子どもたちの話だった。トラフィッカーの

中には子どもに注射をしてハンディキャップをわざと作らせて、物乞いをさせるひどい人がいるらしい。それから15歳～20歳の女の子は売られて売春をさせられるらしい。僕は出発前に読んだ本を思い出した。そこには「子どもの権利をお金で買わないで」と書いてあった。本当にその通りだ。

そして3月25日、「若者の家」の皆と大竹さんにさようならをした。両親に会いに行けない日曜日が嫌いだと言っていたファラさん。もういない両親がもしいたなら将来稼ぐお金で両親を養ってあげたいと言っていたティーランさん。明るくてひょうきんなチャンター君。そして僕を「友達に似ている」と可愛がってくれた、ソン・ボン君みんなありがとう。

僕がこの旅で得た物は友達と生きるパワーだ。この2つの物は僕が大人になるまで、そしてなってもずっと宝物になると思う。

「Sunday」

日曜日は楽しくない
友達の顔も見たくない
「時間なんてなけりゃいいのに」と
私は思う

家族の事を考えたい
今だけは幸せでいたい
でも考えれば考えるほど家族が
自分から遠くなりそう・・・

今日だけは
小鳥の鳴き声も
大好きなヌードルも
みんなきらい
日曜日なんて大きらい

「カンボジアから帰ってきて考えた事」

今回の旅は一言で言うと「自分の今までの人生の中で一番ためになった体験」だった。行っている間は何度も頭をガンと殴られたような気持ちになった。

今回僕が取材した「ホームランド」や「若者の家」にいる子どもたちは、一見楽しそうに過ごしていた。でも話を聞いてみると、やっぱり辛い過去を背負っているのだとわかった。「家に帰りたい。」と泣いていた人や、昔の辛い体験を話した子もいた。皆同じ人間なのになぜ強い者と弱い者がいるのだろう。それは、みなで真剣に解いていかなければならない「なぞなぞ」だ。

でも、そういう施設にも入れない子どもも数え切れないほどいる。全員がちゃんと暮らせるようになるにはどれくらい時間がかかるのかと思う。これから次の世代に活躍するはずの子どもたちをきちんと育てなければ、また同じ事が繰り返されるだけだ。そうならないためにはどうしたら良いのだろうと思った。

僕には今、後悔している事がある。それは泊まったホテルの部屋に「スラム街の貧しい人たちに何かあげて下さい」という紙が置いてあったのに、何も置いてこれなかった事だ。僕は日本人の人たちにお土産をたくさん買ってきたが、結局自分や自分のすぐまわりの人の事だけ考えているようで恥ずかしい。でも、買い物をした時はとても感謝されて「いただきます。」のポーズをされたので、買い物をする事もカンボジアの人たちのためになっているのかなと、後から思った。それにしても今良く考えればいくらでも思いつくのに……。だから、いつか抱えきれないほどお土産を持って子どもたちに会いに行きたいと思う。

今回の旅最大のお土産は友達ができた事だ。ソン君とは帰国後早速メール交換をしている。これからも交流を続けて、いつかは必ずまた会いたいと思う。友達にも紹介して友情の輪を広げて行きたいと思う。

カンボジアにはまだまだ地雷がたくさん埋まっている。地雷は人間の発明の負の遺産だ。今回は地雷の取材はしていないけれど、手足のない人をたくさん見かけて、驚いた。この国には問題が多すぎると思った。

僕にとっての10日間はこれからのきっかけで、全てを理解する事はできなかった。でも、行く前と今とでは確実に何かが変わった。今一番言いたいのは「皆で世界の事実を知ろう。」と言う事だ。知れば誰だって知らん顔はできないと思う。一人や2人では何もできない。皆で考えていく事が大切だ。僕ももっともっと知りたいし、知ったら少しずつでも行動したいと思う。この旅で知り合った全ての人々へ・・・「オークン」(カンボジア語で「ありがとう」)

2002年 春休み友情のレポーター 五十嵐 敬也

2002年春休み 友情のレポーター カンボジア取材レポート

四方 香菜（京都府 / 当時 13 歳）

タイ・カンボジアへの旅～！！

いってきまーす！！（H14.3.18）

タイ王国 首都：バンコク
人口：6100万人
面積：51万3,000平方キロメートル
言語：タイ語
通貨：バーツ（1バーツ=約3円）

まさか行けることになるなんてっ！！
まだ不安だらけだけどここまで来たからにはやるっきゃない！！
向こうの子どもたちとも仲良くなって、たくさんのことを学んでくるゾー！！！！

いっしょに旅行して下さる方々...左奥から事務局長のドミニクさん、子どもレポーターの敬也くん、カメラマンの清水さん、「国境なき子どもたち」スタッフの珠理さん、よろしくお願ひします！！

March 18 かなの日記より
一日目！今日はいよいよ出発の日！！7時間にも及ぶ飛行機での長旅に早くもくたくたに。
でもホテルまでのTAXIはすごいスピードで、疲れも吹っ飛びました！
TAXIの窓から見える景色は日本そっくりで、外国に来ている気がしなかったなあ。

2002年 春 タイ・カンボジア取材旅行・日程
アランヤプラテート（3月19日）
ポイペト（20日）
バタンバン（21・22日）
シェムリアップ（23・24日）
プノンペン（25日）

取材日程

3/19 アランヤプラテート 国境付近マーケットにて

3 / 2 0	ポイペト	NGO、グドーにて
3 / 2 1	バタンバン	ホームランド、若者の家にて
3 / 2 2		裁縫訓練所、ダラちゃん宅にて

カンボジア王国 首都：プノンペン
人口：1052万人
面積：18万1,000平方キロメートル
言語：クメール語
通貨：リエル（1ドル＝約3900リエル）

マーケットで出会った子どもたち 私たちの事、忘れないでね！

初めて会った時から人見知りもせずに笑顔で私たちに接してくれたマーケットの子どもたち、辛かった思い出も楽しそうに話してくれた子どもたちを見ていて言葉では言い表せないような不思議な気持ちになった。この想いは一体何なのかなあ…。

March 19 かなの日記より

2日目！ 今日バタンバンの「若者の家」で働いておられる大竹綾子さんといっしょにタイのマーケットへ取材にいきました！

取材先のマーケットがある、国境付近の町「アランヤプラテート」は、バンコクの「都会～！」て感じの風景から一転して素朴な都会の風景でした。

取材日 H14.3.19

～マーケットの子どもたち～

子どもたちは、私たちが車でマーケットに着くと、パラソルをもって出むかえてくれた。この子たちは、毎日カンボジアから国境をこえてやってきて（このマーケットまでならパスポートがいらない）私たちにしてくれたように観光客を出むかえたり、マーケットのお手伝いをしてお金を稼いでいるそうだ。この子たちには共に生活する父母、あるいはママ母、近所の人などがいるが、一人で働きに来ている子が多い。

～出会った子どもたち～

初めに私のところへきて、パラソルをさしてくれたのはティーアちゃん。とても背が低かったので「こんなに小さな子がこんな仕事をしているなんてっ！」と思ったが、実はわたしより年上の14歳だった！！

ティーアちゃんは義理のお父さんと暮らしているが、いつも殴られたり蹴られたりするの、おばあさんに頼っているそうだ。

ガーくん（12）はパーキングで車の見張りの仕事をしている。家族は15人。（父母と兄弟13人）兄弟は初め14人だったが一人は亡くなってしまったそうだ。彼は家族の中の4人と、カンボジアのポイペト（シェムリアップへ行くバス停の近く）で

暮らしている。(5人家族)兄弟のうち1人は病気で、1人はパスポートの偽造を仕事にしている。

今、ガーくんが一番楽しいのは、NGOのグドーという組織が運営している読み書きの学校へ行くこと。(朝ごはんもここで食べている。)

ここでガーくんは月～金の7:30～12:00の間、小学2年生レベルの勉強をしている。

来年からは他の子どもたちもこのような学校に行けるらしく、楽しみにしているそうだ!!

モンちゃん(12)はカジノホテルの裏で帽子を売っている女の子。12人家族(父母と兄弟10人)でポイペトのオーバイチュアンという村に住んでいるそうで、この村はマーケットからオートバイで約30分程の所にある。

モンちゃんはいつもピックアップ(トラックの小さいような車)やバイクにお金(ピックアップで30パーツ = 約100円 バイクで5パーツ 約17円 ほど)を払って乗り、マーケットまで来るらしい。

取材日 H14.3.20

～NGOグドーの活動～

今日は昨日会ったガーくんも通っているNGOグドーへ取材に行った。ここには次の4つのプログラムがある。

- 1 麻薬や暴力などで精神的ショックを受けた子どもたちのカウンセリングをするコース(15～18才) = リハビリコース
- 2 一日を施設で過ごすコース(デイケア)
- 3 施設に住まい、勉強するコース(家が貧しい子など)
- 4 半日間勉強をするコース

まずはリハビリコースを見た。ここでは15～18才の子どもたちが麻薬や暴力から受けた精神的ショックから立ち直る為のリハビリを行っている。また、カンボジア人なのにタイに連れて行かれ働かされていたトラフィックチルドレンもここに收容されている。活動内容は、みんなで絵をかいたり、自分たちの住む簡単な家をつくったりと様々である。中でも面白かったのはサーカス訓練!このプログラム(6ヶ月間)の最後には、それまで訓練してきたサーカスの技を披露するショーをひらき、達成感やチームワークの大切さを子どもたちに教えるのだそうだ。プログラム後は施設へ行くか家に帰るかのどちらかになる。

次にデイケアセンターへ行った。ここには家庭が貧しい子どもや家庭は安定しているが、勉強がしたい子どもたちが通っている。定員は150名だそうだが、現在実に149人の通所者がいる。ここでは午前・午後に分けて勉強をしていて、食事の提供、車での送迎、あと、怪我などのときの医療手当ても行われている。また、できそうであれば、子どもたちが公立の学校へも行けるよう、努力されているそうだ、そして、

寝泊まりでケアをするコースと、半日制の学校コースについてもお話を聞かせて頂いた。

寝泊まりのコースでは家族のいない子どもたちをひきとっておられる。主に編み物、絵、刺しゅうなどを活動としてされているが、希望があればクメール語の識字のクラスへも参加できるようになっている。

ここで子どもたちが学ぶ間に、NGOの方々はこの子どもたちの家族を捜し、もし見つけることができれば一緒に暮らせるようにされるそう。でも、また親が子どもを捨ててしまわないよう家族と話し合い、政府の誓約書を作ってから子どもを家族の元に戻すそう。この後、親がまた子どもを捨ててしまった場合は、罰則を与えることはできないが、親にもカウンセリングを受けさせることになる。

半日制の学校コースにはガーくんも通っていて、また会うことができた！ここに来る子どもたちは、自主的にこの学校へ通っていて、午後からはガーくんの様に働く子どもが多いそう。ここには幼児～小4レベルのクラスがあり、だいたい4～14才の子どもたちが通ってきている。そして毎日出欠をとり、登校できない子どもたちの確認をされるそう。

取材日 H14.3.21

～KnKの活動～

国境なき子どもたち(KnK)は、バタンバン市内のストリートチルドレン救援NGO「ホームランド」を支援、又バタンバン市内に2000年秋より新しい人生を踏み出す前の青少年を受け入れることのできる施設「若者の家」を開設するなどの活動を行なっている。

今日は、その活動現場の一つ「ホームランド」を訪問した。このホームランドには若者の家より小さい子どもたちが収容されている。ほとんどは、5～15才の子どもたちであるが、もっと小さい子もいて、最年少のオンキーアちゃんは僅か2才だった！オンキーアちゃんは事故で両親を亡くし、兄弟4人でこのホームランドに来たのだそう。

ここ、ホームランドでは英語、識字などの色々な勉強や月一回の健康診断、及び鶏・豚の飼育も行なわれている。豚は子ども産んでどんどん増えていくので、農家へと帰る子どもにプレゼントされるそう。

また、ここではトラフィックチルドレンもいて、50人中17人がその過去をもっている。(男10人、女7人)人身売買などによってタイに送られていた彼等を「トラフィックチルドレン」と呼ぶ。

この子どもたちはタイで警察に捕まり、送還プログラムによってカンボジアまで運ばれ、トラフィックとチルドレン用の施設に入った後、ホームランドや若者の家に収容されたのだそう。

タイで働いていた期間は一人一人異なり、ほんの少しの間の子もいれば3年もの間、

タイで働いていた子もいる。タイでは花やキャンディを売って働く子が多く、一晩で200バーツ(600円)ぐらいの稼ぎの子や1000バーツ(3000円)もの大金を稼ぐ子もいるそうだ。

しかし、この稼ぎのほとんどはトラフィッカー(元締め)の手に渡ってしまう。中には、稼ぎが悪いと殴られたり電気ショックを与えられるスメインちゃんのような子もいる。

他にも、違法でカンボジアからタイへ渡る人の案内をする仕事(ダエンちゃん)やケーキをつくって売るなどの仕事があるが、どれも仕事を始めた理由は「家が貧しいから」や「トラフィッカーに誘拐されて」など悲しい理由ばかりだ。

午後からは若者の家を訪ねた。「若者の家」はホームランドより少し大きめ(15才~)の子どもたちが暮らす施設だ。さっそくお話を聞かせてもらった。

ここでも家族の為にタイへ働きに行った子どもたちに会うことができた。

期間・回数は人によって様々だったが、何度も何度も行った子は、結構楽しんで行った子が多いようだった。(ほとんどの人が初めはトラフィッカーに連れられてタイへ行ったが、その後から自主的に行く人も多かった)

大抵の子はキャンディーや花を売って働いていったが、バンナーくんの様に、漁業や農業の手伝いを各地でするといった珍しい仕事をしている人もいた。

若者の家で話をしてくれた子どもたちは、仕事が好きな子が多いようで、「今からタイへ帰りたい!」という子もいた。

収入は一日大体400~700バーツが平均で、その内一ヶ月に一度トラフィッカーが家族に送る金額はたったの1000バーツ程だそうだ。(家族が病弱だったりする為、決して充分ではない金額)

彼らの将来の夢はタイにいた時と今とは変化していて、タイにいた時は「勉強がしたい!」だったのが、今は「職業訓練を受けて、床屋、木彫り職人になりたい!」など様々である。

日本ではあまり聞かないような「トラフィクトチルドレン」の存在や人身売買が本当に盛んに行われているという事実がカンボジアにはあった。そんな環境の中でも一生懸命に夢を見出す子どもたちはとても凄いなと思った。この子どもたちが安全に暮らせるよう保護されることは勿論、彼らの夢を支援する意味でも「若者の家」や「ホームランド」のような施設がもっと沢山できればいいな~!!

March 21 かなの日記より

4日目!今日は取材だらけの一日ですごく疲れましたが、でもその後の若者の家のお兄さん・お姉さんは親切だし、ダンスもとっても楽しくて一日の疲れが吹っ飛びました!あと、私の同級生からのカードも大好評でした!

このカードのお陰でカンボジアの子どもたちとも仲良くなれました。みんなありがとね~

今日はホントに疲れたけどホントに楽しかった!!

取材日 H . 1 4 3 . 2 2

～「若者の家」に住まう子どもたち～

今日は裁縫の職業訓練所に行った。なんと先生は「若者の家」の職員、ダラのお母さん！

ここには、「若者の家」からも7人の女の子が訓練に来ている。(毎週月～土曜日)

この訓練所は、技術を身に付けた子どもから卒業するというシステムがあって、卒業までに大抵は2年程かかるそうだ。(もちろん個人差はある)

通ってきている子どもたちは「楽しい！将来もこれを生かせる仕事をしたい！」と話してくれた。

実際に、お手製のズボンをはいている子もいた。

次に「若者の家」に住む子の一人、ダラちゃん(上のダラさんとは別の人)のお家にお邪魔した。

「若者の家」に入所しているダラちゃんにとっては、久しぶりの我が家である。

ダラちゃんは7人兄弟の3番目で、父母を含む9人家族。彼女の一番上の姉だけが働いていて(ビールガール)他の家族を養っているのだそうだ。7ヶ月前までは、お父さんも働いていたそうだが、(シクロの運転手と大工)事故のため、半身麻痺になり、話すこともできなくなってしまったそうだ。

彼女は、「家族が恋しい。家に帰って家族と一緒に暮らしたい。」と涙ぐんだ。

この家には彼女の小さな弟や妹も沢山いるが、みんな政府の補助を受けて公立学校に通えているとのこと。

子どもたちが「若者の家」や公立学校へ行けていることに対して彼女のお母さんは「とても嬉しい。そのことによって職業訓練も受けさせられるし、仲間もできるから。」と話して下さった。

ダラちゃんの涙は心にしみたなあ～

「若者の家」にはダラちゃんのようにほとんど家に帰っていない子が大勢いる。それどころかもう親のいない子だって少なくない。私より遥かに小さい子にも「帰りたくても帰れない」厳しい現実がのしかかっているのだ。

March 22 かなの日記より

5日目！今日はプレゼントを渡したヨ。私のお土産は「日本のおもちゃ詰め合わせセット(！！)」です！皆とても喜んでくれました。中でも剣玉は大人気で、私が「もしかめ」をしただけで大盛り上がり！！皆必死で練習していました！ちょっとした「剣玉ブーム」が起こったらうれしいなあ。

取材を終えて

数ヶ月までは予想もしていなかったこの取材旅行...本当に行かせて頂けたことが、

今でも半ば信じられない気がしています。でも私は確かにカンボジアの地を訪れ、日本ではなかなか知ることのできないことをたくさん知り、今まで感じたことのなかったことをたくさん感じられたと思います。

この旅行に参加するまで、私は「難民」「ストリートチルドレン」といった人々に対して「同情すべき人々」という想いを持っていました。でも実際にそのような状況に置かれている人々に出会って「厳しい社会の中でも生きようとする力を持ち続ける強い人々」だと心の底から感じました。そしてもう一つ...いつも当たり前のように家族と過ごしてきた自分がいかに裕福かということも知りました。これを一番実感したのは旅行中、ホームシックにかかった時です。ほんの数日間、家族や友だちに会えないと思うだけで、どうしようもなく悲しくなっていました。カンボジアの子どもたちの中には既に親を失ってしまった子や、親が行方不明になり、将来会えるかどうか分からないという子が大勢います。その点、今は寂しくても数日後には必ず我が家へ帰ることのできる私はなんて恵まれているのだろうと気付いたのでした。

私が出会った子どもたちは過去の戦争の爪あとである地雷の問題をはじめ、様々な問題が山積するカンボジアで労働し、勉強し、将来を自分の力で生きていく為の技術の習得に毎日励んでいます。たとえ、家族と離れていても明るく強く夢を見出していく彼らと出会って、私は「絶対に必要なものが一つある！」と思いました。それは「平和」です。戦争は建物や自然を破壊するだけでなく、それまでに築き上げてきた人々の生きる力さえも奪い去ってしまいます。彼らが一生懸命に培っている力を生かす為には彼らが生きている社会が平和であることが絶対条件だと思います。過去の悲しい出来事が二度と繰り返されないことを祈ります。

カンボジアはまだまだ恵まれた国であるとは言えません。全ての子どもたちが安心して家族と共に暮らし、学校へ通うことができる日常を手に入れるためには、世界からの援助が必要です。たった数日しか一緒にいられなかったけれど、辛さを感じさせないくらい明るく、人なつっこい彼らの幸せを願わずにはいられません。その為に、「私にできる何かを始めよう！」今、そう心に誓っています。

取材日 H14 3.23~24

若者の家のあるバタンバンを後にして、ティーランちゃん、ファラーちゃん、ソンボンくん、チャンタくん(若者の家で暮らす子どもたち)と一緒にアンコール・ワット遺跡群を見学するため、シエムリアップにやってきました！

アンコール・ワット

12世紀前半、この地を治めたスーリヤヴィルマン2世(生年不詳~1150年頃没在位1113~1150年頃)により建造された超巨大寺院。

ユネスコの世界文化遺産にも登録されたこの寺院のアンコール・ワット様式と呼ばれる独創的な建築様式は訪れた者を圧倒し、魅了して止まない。(在カンボジア日本国大使館ホームページより)

壁面を埋めるレリーフからは、当時の戦闘の様子をはじめ、貴族や庶民の日常生活の情景などを知ることができます！

アンコール遺跡とは？

アンコールとは、9世紀から15世紀にかけてインドシナ半島の広い範囲を支配した王朝の名前です。その中心は、現在のシエムリアップ中心にあります。アンコール王朝の支配者たちは、仏教やヒンズー教を信仰し、多くの石造の宗教建造物を建設しました。それらが現在、アンコール遺跡と呼ばれています。

バイヨン

アンコール・ワットの北に位置する広大な遺跡群であるアンコール・トム。クメール語で「巨大都市」を意味するアンコール・トム城都は、12世紀後半ジャヤーヴァルマン7世により建造された。

このアンコール・トムの中心寺院がバイヨンである。クメール語で「父なる魔力」を意味するこのバイヨン寺院の四面に観世音菩薩の慈顔が刻まれた四面仏顔塔はあまりにも有名であると共にこの寺院を強く人々に印象付けるものとなっている。

Ta Prohm

タ・プロム

他の遺跡とは違い、意図的に放置されている。巨木のからみついた景観が印象的。

おまけのコーナー

タイのお料理

レッドカレー

見るからに辛そ〜っ！！なこのカレーの赤は赤唐辛子など、スパイスの赤！！
色々な種類がある。タイのカレーっておもしろい！

イエローカレー

日本にもあるような黄色いカレー。(でも辛そう。)カレー粉の黄色が特徴のタイカレーの一種!

グリーンカレー

日本ではあまりお目にかかることのできない緑のカレー! やっぱり辛~い。このカレーのグリーンは青唐子やコブみかんの皮からとったもの!

サークーサイムー

甘く味付けした具をタピオカで包んだ、屋台でおなじみの料理。おいしくて可愛い~。

ソムタム

パパイヤのサラダ。フルーティというよりは辛い。残った汁をカオニャオにつけて食べると美味しいゾ!!

パイナップルライス

パイナップルの器に盛られた、甘いチャーハン! 私のいちおし料理! ?

カオニャオ

タイ風もち米を蒸したもの。日本のもち米とは違ってパサパサしている! 辛いものと食べると Good!!

2002年 春休み友情のレポーター 四方 香菜